

タダタカそれともチュウケイ？

佐久間 達夫

今から十年程前、ある会合で、伊能忠敬のことが話題にのぼり、「忠敬の名前の読みは、タダタカかチュウケイか」ということになり、それを傍聴していたS新聞社の記者が拙宅へ訪ねてきた。

左肩にカメラをさげ、右手にメモ用紙を持ったその記者は、応接室の椅子にすわり、暫く雑談をした後、「今日の会合で、伊能忠敬の名前の読みが問題になったが、タダタカとチュウケイのどちらが正しいですか」と、質問する。筆者は、「タダタカが正しいです。しかし、その理由を説明するには少し時間がかかるがいいでしょうか」「結構です」ということになり、次のように話した。

伊能忠敬は、宝暦十二年（一七六二）十二月八日に、佐原村（現香取市佐原本橋元）の伊能三郎右衛門家の一人娘「達」の婿養子に入ったのですが、そのとき仮親であった千葉県多古町南中の平山藤右衛門季忠が、三治郎（忠敬の幼名）の地位を高めるために、自分の師であった江戸昌平醫林大学頭鳳谷に願い出て、三治郎を形式的に入門させ、名付け親になって貰ったのです（「旌門金鏡類録」「伊能家家牒」）。

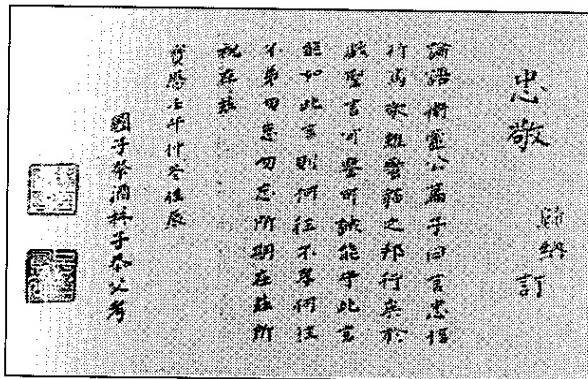
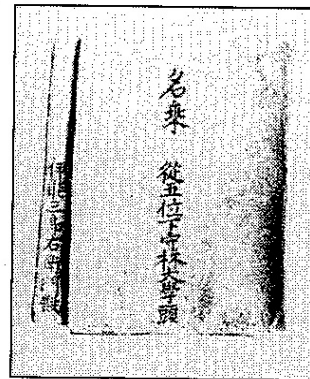
鳳谷は、『論語』第十五の衛霊公から「忠」と「敬」の二字をとり、「タダタカ」と命名し、次のような「名乗書」を忠敬に与えたのです。

資料一 名乗書

上包

（伊能忠敬記念館所蔵）

正本



忠敬

塚納訂

論語衛靈公篇子曰言忠信
行篤敬雖蠻貊之邦行矣
哉聖言可鑒可誠能守此言
哉如此言則何往不孝何往
不弟勿急勿忘所期在茲所
祝在茲

寶曆壬午仲冬佳辰

國子祭酒林子恭父考

林大学の政
忠敬と名を
命を重んず
入

名乗 從五位下守林大学頭

伊能三郎右衛門殿

門人平山季忠四子忠敬入余門因与
可称升堂志 負笈慕儒風
努力聖賢業 豈忘蚩雪功

祭主 林子恭父

□ □

忠敬

塚納

訂

論語衛靈公篇子曰言忠信
行篤敬雖蠻貊之邦行矣於
戲聖言可鑒可誠能守此言
能如此言則何往不孝何往
不弟勿急勿忘所期在茲所
祝在茲

寶曆壬午仲冬佳辰

國子祭酒 林子恭父考

□ □

・名乗書書き下し文

論語の衛霊公篇に、子曰く、言忠信にして、行篤敬なれば、蠻貊の邦と雖ども行われんと。

(以上が衛霊公記述内容)

ああ聖言鑒みるべく誠むべし。能く此の言を守り、能く此の言の如くせば、

則ち何くに往くとして孝ならざらん。

何くに往くとして弟ならざらん。怠る勿れ、

忘るる勿れ。期する所茲に在り。

祝う所茲に在り。

・覚書

林大学の頭
カククカ
忠敬と名を
御つけ下されし
命名書入

「名乗書」には、「門人平山季忠の四子忠敬、余の門に入る。因つて与う」とあつて、苗字が記されていない。したがつて忠敬を季忠の子どもとみて命名したといえる。なお副本の忠敬の「敬」の字に「タカ」と振り仮名がしてある。

また、「名乗書」の表には、「名乗 従五位下守林大学頭」とあつて、折り返した処に「伊能三郎右衛門殿」と書かれている。したがつて、忠敬を既に伊能三郎右衛門家の主人と見ての宛名と考えられる。

このように林大学頭に『論語』の一節から「忠」と「敬」の二字をとり、命名して貰つたのが「タダタカ」である。

次に地元「チュウケイ」の呼び名が浸透した理由は、訓読みの「タダタカ」より、音読みの「チュウケイ」の方が読みやすく親しみがあるので、愛称として定着したのでしよう。

私が昭和四十年代に勤務していた佐原小学校（現香取市立佐原小学校）では、忠敬が、第一次蝦夷地測量に出立した寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日（太陽暦六月十一日）を記念して、毎年六月十一日に「忠敬祭」という行事が開催された。

○ 忠敬祭の学年別指導内容

- 第一、二、三学年は、学年主任の忠敬についての講話
- 第四学年は、伊能忠敬記念館の忠敬の遺書遺品見学
- 第五学年は、市内諏訪公園に建立されている忠敬銅像周辺の清掃
- 第六学年は、市内牧野の観福寺の塋域にある忠敬の墓参り

佐原小学校の校歌には、

「香取の神に守られて 忠敬翁がしいた道」
と、歌われているが、この行事を職員も児童も「忠敬祭」と、いつているので、子供たちが成人になつても「チュウケイ」の愛称が定着してしまつたのである。

資料二 佐原小学校校歌

横井弘 作詞 山本文晴 作曲

一、ゆたかな利根の 歌声に

みのりのときを まねく土

そうだ いのちの ふるさとの

土を愛して 育つのだ

佐原 佐原 佐原小学校

二、香取の神に 守られて

忠敬翁が しいた道

そうだ 教えの 花かおる

道を はてなく 伸ばすのだ

佐原 佐原 佐原小学校

三、かがやく屋根を よせながら

あしたの夢を ひめる町

そうだ 栄える 日本

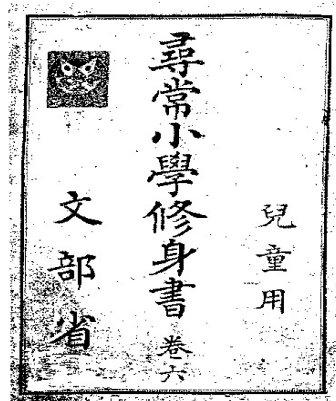
町を 伸ばすよく つくるのだ

佐原 佐原 佐原小学校

伊能忠敬旧宅や伊能忠敬記念館の見学者、特に年配の方に「私等は、小学校の修身（現在の道徳に類似した領域）や読本（現在の国語に類似した教科）で伊能忠敬と習ったが、地元の人には、『チュウケイサン』^{あなご}といっているが、どちらが正しい呼び方ですか」と、よく聞かれる。そのときは、前記したような内容を話すと、納得して喜ばれる。

したがって「目くじらを立てて論争する必要はないが、できれば本当の呼び名を知って貰ったうえで、愛称を使ってほしいですね」といって話を終わりにした。

資料三 国定教科書「尋常小学校修身書」



第十八課 勤怠
伊能忠敬は上総の人なり十八歳にして下總佐原村に於て伊能氏を以て侍り伊能氏は世に酒造の職を業とし富者を以て聞えしかど忠敬の家を以てし頃には家道頗る衰へたり忠敬深く之を憂へ何とぞして家産を恢復せんとして其の好める書術書を止む學問をさへせしおきて一意専心家業に勤怠し家法を定め餘者を皆とし躬を以て戒を奉りしかば次第に家産を挽回し其の四十歳の頃には舊に倍する資産を造るに至れりされば關東に二四の親類ありし際毎回多くの金銀を出して窮民を救ひ官より厚く賞せられたり。
格言 精神一到何事不成チヤサン。

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)